

第3回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

1級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30)
1〜20は音読み、21〜30は訓読みである。

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。(40)
19、20は国字で答えること。

(三) 次の1〜5の意味を的確に表す語を、後の□から選び、漢字で記せ。(10)
2×5

- 1 杳渺たる海彼を見齋るかす。
2 天下の至柔は天下の至堅を馳騁す。
3 恩師の遺稿集に誄文を掲載する。
4 和気香風の中に臥榻を据えて寝る。
5 窮鼠嚙狸の逆襲に狼狽する。
6 美麗にして姚冶、女子に擬せざる莫し。
7 皇座罔罔として以て暉を垂る。
8 子赤くして糲粟の如く食らうべし。
9 九有圻土の君権輿を牧外に廻らす。
10 宣ぶること憑虚ならざるも蹠実に通ず。
11 君子箏笙簫管の声を聴く。
12 卍歳天台の華頂峯に出家す。
13 錦巖飛瀑激しく春岫暉桃開く。
14 昏以て期と為す、明星哲哲たり。
15 畚築を称り土物を程り遠邇を議る。
16 其の胼攀を舒べて之を置く者有り。
17 禁月落つる時畚煙深き処我春を行く。
18 骰子を以て之を擲ちて勝者を直と為す。
19 相ともに弔賻し其の喪を治む。
20 山に因り奢大なる壘塋を為る。
21 現地に飛んで将卒を犒う。
22 溪を隔てて遙かに夕陽の春くを見る。
23 大臣毎に僧の面相を調る。
24 御熊野に詣ずる諸人榲の葉をかざす。
25 盗言孔だ甘し、乱是を用て餒む。
26 大なる潮の哮りつつ寄せ来りぬ。
27 宇陀の高城に鷓鴣張る。
28 爰許の存知せざる所なり。
29 先には貞しくして後には黷る。
30 百年を期と曰う、頤わる。

- 1 めらめらとシンニのほむらを燃やす。
2 監督の首を上げ替える必要がある。
3 少しくタシナみに欠けるところがある。
4 キユウサンの如き拍手が響き渡る。
5 論敵の鋭いキホウを巧みに躲す。
6 身形を当世風にコシラえて出掛ける。
7 リヨウジ乍ら一言申し上げておく。
8 赴任してヘキスウチ手当が支給される。
9 血管をケツサツして止血する。
10 正月はトシトクジンとて普く人が祝う。
11 末尾にカノエイ又孟春之を記すとある。
12 アミダクジを引いて当番を決める。
13 国民をマンチャクする言辞である。
14 近臣のフウカンが主君の逆鱗に触れた。
15 宴席に馴染みのホウカンと芸者を呼ぶ。
16 コウロカ上一点の雪の如く妄念は消えた。
17 遠来の使節をコウロカンで応接する。
18 白色人種の間でコウカロンが広がった。
19 真珠の目方をモンメで量る。
20 ブリキ製の玩具の乗り物で遊んだ。

- 1 血相を変えること。怒りの表情。
2 父祖の業。家業。
3 前と違うことを言う。うそをつく。
4 高い鼻。鼻柱が高いこと。
5 師の席。学者の書齋。

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1 次の四字熟語の(1〜10)に入る適切な語を後の□から選び漢字二字で記せ。(20)
2×10

- (1) 鳳嘴 海市 (6)
(2) 匿瑕 一箭 (7)
(3) 走肉 八面 (8)
(4) 以德 一暴 (9)
(5) 邪教 比肩 (10)

いんし・きんゆ・こうし
じっかん・しんろう・ずいしょう
そうちよう・どうし・りんかく
れいろう

問2 次の1〜5の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10)
2×5

- 1 満悦のさま。また媚び諂うこと。
2 法外な贅沢の喩。
3 瀑布の壮大さの形容。
4 心優しく淑やかなさま。
5 兄弟誼誼。

- 金塊珠磔・渴驥奔泉・婉婉聽従
揺頭擺尾・桃傷李仆・銜尾相隨
銀河倒瀉・一擲千金

1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

氏名

(五) 次の熟字訓・当て字の読みを記せ。

- 1 厚皮香
- 2 冬眠鼠
- 3 絡新婦
- 4 規尼涅
- 5 戯奴
- 6 白膠木
- 7 行滕
- 8 馬陸
- 9 海蘊
- 10 諾威

(10)

1×10

(七) 次の1～5の対義語、6～10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。

□の中の語は一度だけ使うこと。

(20)

2×10

対義語

類義語

- |      |       |
|------|-------|
| 1 夥多 | 6 往還  |
| 2 麤餐 | 7 狼狽  |
| 3 利達 | 8 檢覈  |
| 4 無着 | 9 不稽  |
| 5 下司 | 10 樵蘇 |

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送り)がなに注意して(ひらがな)で記せ。

(10)

1×10

〈例〉健勝……勝れる ↓

けんしょう  
すぐ

- ア 1 竄滴……………2 滴す
- イ 3 抔土……………4 抔う
- ウ 5 贍給……………6 贍す
- エ 7 豢豕……………8 豢う
- オ 9 驍悍……………10 驍い

こうたん・じょうろう・すうじょう  
ぜんしゅう・せんしょう・せんめい  
そらい・たくらく・どうよく  
はいもう

- (八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分(20)を漢字で記せ。
- 1 シトク<sup>1</sup>の愛。
  - 2 君子はオクロウ<sup>2</sup>に愧じず。
  - 3 礼は未然の前に禁じ、法はイゼン<sup>3</sup>の後に施す。
  - 4 キシ<sup>4</sup>連抱にして数尺の朽あるも良工は棄てず。
  - 5 レイサイ<sup>5</sup>一点通ず。
  - 6 カンシヨ<sup>6</sup>は楽しんで淫せず。
  - 7 ロカイ<sup>7</sup>の立たぬ海もなし。
  - 8 鉄中の錚錚<sup>8</sup>、庸中のコウコウ<sup>8</sup>。
  - 9 泉石のコウコウ<sup>9</sup>、煙霞の痼疾。
  - 10 オガクズ<sup>10</sup>も言えは言う。

(九) 文章中の傍線(1～10)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

(30)

2×10

1×10

**A** 烏帽子が岳の空鬱然として、洋墨を潑せる雲むらむらと立ち渡りつ。雷の殷々と鳴り出で、空気は俄かに打ちしめりて、冷風<sup>1</sup>サツと面を掃い、湖水の音か、雨の音か、将万山の樹木枝を震うの音か、蕭然たる音山谷に起こり、天地に瀾り、凄まじきこと云う可くもあらず。烏帽子が岳以西の山々は、モウモウ<sup>2</sup>たる印度藍色の雲に蔽われて、風丸雨弾の戦いまさに酣なれど、国境の連山は、雪色猶鮮やかに、天に倚り地を踏まえ、金輪際動かじと、惨として風雨の来襲を待つ状、沈鬱悲壮、跌宕なる自然の威力の森然として身に浸むを覚う。大壑に臨みてさし出でたる檜の古木に、梟あり、頻りに咽を鳴らす。雲は吾が頭上まで真闇に掩いかかり、風山壑を撼かし、豆大の雨一点——二点——千万点ばらばらと落ち来りぬ。余は風雨雷電の重囲を衝いて、峠の茶屋を指して驀地に駆け下りぬ。

(徳富蘆花「自然と人生」より)

**B** 院の御霊は雲間に響く御声してからからと異様に笑わせたまい、おろかや解脱の法を説くとも、仏も今は朕が敵なり、涅槃も無漏も肯わじ、往時は人朕が光明を奪いて、朕を泥犁の闇に陥しぬ、今は朕人を涙に沈ましめて、朕が冷笑の一声の響きの下に葬らんとす、朕がケンゾク<sup>3</sup>の聞きより聞きに伝い行く悪鬼は、人のハイフ<sup>4</sup>に潜み入り、人の心肝骨髓に咬い入って絶えず血にぞ飽く、視よ見よ魔界の通力もて毒火を彼が胸に煽り、紅炎を此が眼より進らせ、やがて東に西に黒雲狂い立つ世とならしめて、北に南に真鉄の光の煌めき交う時を来し、憎しとおもう人々に朕が辛かりしほどを見するまで、朝家に酷く崇りをなして天が下をば掻き乱さんと、御勢いリリしく誥げたまうにぞ、西行、熱き涙をきつと抑えて、恐る惶るいささか首をモタ<sup>6</sup>げける。

(幸田露伴「二日物語」より)

**C** 夫の油絵は其の法甚だキツクツ<sup>7</sup>にして、人をして毎に其の力を逞しくするを得ざらしむ。其の真に之を究めて蘊奥に詣るものは僅かに指を屈するに過ぎず、通常世間に有る所の油絵は概ね幾ど妙想を欠けり。今より数年ならずして、欧米の画家多少東洋の画風を採取し、更に簡潔雅純を貴び、竟に一般の人皆尋常鹵莽の油絵よりは寧ろ探幽其の人の風の如き淡色の画を好みするに至るは、予め期して待つべきなり。蓋し其の翕然として頓に東洋の風に傾くは、ヒツキヨウ<sup>8</sup>一時油絵を激賞せし反動なり。ケイジツ<sup>9</sup>日本に來渡せる一米人の言を聞くに、曰く、歐洲の画家バンキン<sup>10</sup>漸く掛額となすべき画を輟め、更に宮殿若しくは寺院等の内部に就いて広闊なる裝飾をなさんとすと。

(大森惟中訳・フェノロサ「美術真説」より)